

道徳性発達と心の理論

企 画：	「道徳性・向社会性」分科会	
話題提供者：	林 創	(岡山大学)
	鈴木 亜由美	(広島修道大学)
	長谷川 真里	(横浜市立大学)
ファシリテーター：	首藤 敏元	(埼玉大学)
司 会：	二宮 克美	(愛知学院大学)

[企画主旨]

「道徳性・向社会性」分科会は、毎年大会開催時にラウンドテーブルを企画している。今回は「心の理論」研究の枠組みから検討されている道徳判断研究の最前線を紹介していただき、新しい研究動向を知る機会にする。“Old Question, New Answer”を期待し、参加者とともに議論を深めたい。

他者の知識状態の理解と関連した道徳判断 林 創 (岡山大学)

道徳判断と心の理論は、研究の焦点にやや違いがあり、隔たり(gap)があるという指摘もされている。しかし、両者の関係は深いもので、実際に近年では実証的な発達心理学的研究が増えつつある。こうした近年の研究動向を古典的な研究と合わせてふまえて、幼児期から児童期にかけての心の理論と関連した道徳判断の発達の研究を紹介する。これまでの研究によると、幼児期から意図(わざと/わざとでない)や動機といった心的状態を考慮して他者の行為の善悪を判断できるようになることが示唆されている。しかし、心的状態は意図や動機だけではない。大人は「知識状態」(結果につながることを知っている/知らない)も道徳判断の手がかりとして使っている。そこで、子どももこのような手がかりを考慮するのかを検討したところ、知識状態そのものは正しく理解できたものの、道徳判断では大人とは違った反応が見られ、「知っている」方がより悪いという判断が幼児では少なかった。それゆえ、他者の心的状態に敏感になると一律に道徳判断が大人に近づくわけではなく、幼児期の子どもは、大人とは少し違った道徳判断の基準がありうるということが示唆される。こうした知見を紹介しながら、幼児期から児童期にかけての発達の様子を考察し、今後の課題について検討する。

幼児における他者の行為についての故意性判断と道徳判断 鈴木 亜由美 (広島修道大学)

意図にもとづく道徳判断についての研究と意図理解自体についての研究は、従来別の領域として行われてきたが、近年道徳的発達と「心の理論」の関連を検討する必要性が説かれており、意図理解についてもこのような検討が必要であると考えられる。幼児(4-6歳児)を対象に、その行為が意図的に行われたのかそうでないのかを弁別する故意性判断に焦点を当て、道徳判断との関連から検討した研究を紹介する。具体的には、同じ場面について故意性判断と道徳判断の両方を求めた際に、どちらの判断を先に行うかによって、それぞれの判断に差が生じるかどうか、また道徳判断が生じやすい対人葛藤を含む場面とそうでない場面を比較して、行為の故意性判断の正確性に差が生じるかどうかを検討した。その結果、故意性判断を道徳判断に先立って行った場合には逆の順序で行った場合よりも、故意性にもとづく道徳判断がされやすいことがわかった。また行為の故意性判断は対人葛藤を含む場面の方がそうでない場面よりも難しいことがわかった。これらの傾向は特に4歳児において顕著に見られ、「心の理論」獲得前後の子どもにおいて、行為の意図に注目させる手続きを行うことによってより意図を考慮した道徳判断がされやすいこと、意図理解の正確さは行為の背景にある道徳的文脈によって影響されやすいことが示唆された。

事実と価値：異論に対する理解と寛容の判断 長谷川 真里 (横浜市立大学)

道徳判断研究において、“である(is)”と“べきである(ought)”の区別は重要であった。Wainryb(2004)によると、これはまさしく、事実に基づく信念と価値的信念に対応するが、心の理論課題は前者の問題、善悪判断などの道徳判断は後者の問題と考えられてきた。しかし実際には、道徳判断は事実に基づく信念と価値的信念を調整する過程であり、また、事実についての判断に道徳的観点が関与することもある。たとえば、個人が中絶やしつけの是非について判断するとき、生命やしつけについて個人が持つ事実に基づく信念自体が判断に影響する。社会的領域理論の枠組みで行われた、自分と異なる意見(異論)についての幼児の判断の研究を紹介する。ひとつは、異論の正誤判断(異論自体が間違っているか; 事実の問題)、もう一方は、異論を持つ他者への寛容性判断(異論を持つ他者から遊びを誘われたときの反応から測定; 価値の問題)である。提示される異論は、道徳的問題、個人的問題、事実という、3領域であった。その結果、異論の領域に応じて幼児は2種の判断を行っていた。Wainrybの研究の紹介も含め、事実に基づく信念と道徳的信念が相互に関与しあう様相について、考えていきたい。